

# 千島列島ものがたり

小樽市 阿保 精 一

## 1. 千島列島

千島列島は北緯 43°40′ 東経 145°33′ 国後島南端ケラムイ崎から北緯 50°52′ 東経 156°29′ 占守島北端国端崎までの約 1,180 軒間に羅列した大小 24 島の総称で、南部千島に属するものは国後（クナシリ）島、択捉（エトロフ）島、色丹（シコタン）島の三島、中部千島に属するものは得撫（ウルップ）島、知里保以（チリホイ）南北両島、武魯頓（プロトン）島、新知（シムシル）島、計吐夷（ケトイ）島、宇志知（ウシシル）南北両島、羅処和（ラシュワ）島、松輪（マツワ）島、雷公計（ライコケ）島、捨子古丹（シャスコタン）島、越渴磨（エカルマ）島、知林古丹（チリンコタン）島、春牟古丹（ハルムコタン）島、温禰古丹（オネコタン）島、磨勘留（マカナル）島の 17 島、北部千島に属するものは、志林規（シリッキ）島、幌筵（パラムシル）島、阿頼度（アライド）島、占守（シムシュ）島の 4 島である。これらの諸島は千島火山脈の頭背を形成して南西より北東に稍弓形に延び太平洋とオホーク海を南西に分け、占守海峡を隔てて露領堪察加（カムチャッカ）南端ロバッカ岬となる。

総面積 1 万 2 百余平方軒となり、各島の面積は下記の通りである。（平方軒以下四捨五入）

南部千島	4,894 軒 <sup>2</sup>
クナシリ島	1,500
エトロフ島	3,139
シコタン島	255

中部千島	2,727 軒 <sup>2</sup>
ウルップ島	1,429
プロトン島	8
ケトイ島	71
ラシュワ島	63
ライコケ島	4
エカルマ島	31
ハルムコタン島	74
マカナル島	43
北部千島	2,593 軒 <sup>2</sup>
パラムシル島	2,042
アライド島	156

## 2. 気象

南千島は一般に海上気象に左右されるので、寒暑の差はそれほどなく、極寒期は北海道根室地方と大差なく、上川十勝地方に比べると多分に高温である。風は 10 月下旬から翌年 4 月迄概ね北西の風が強く、11 月 12 月が最も強いが 1 月以後は稍衰える。

霧は 3 月から 9 月に生じ、6 月、7 月に多発する。降雪は 11 月に初まり翌年 5 月に終る。1 月、2 月が最も多雪であるが強風のため吹去られ、各地とも山間凹地以外は僅かに 1 米 3 内外である。

尚 4 月下旬から融け初め 5 月下旬には消雪する。流氷は西海岸では北又は北西風によって襲来し、偏南東風で流出する。

又 1 月から 3 月迄は通常海岸が氷結して航海は出来ないけれども、東海岸の択捉島単冠湾、国後島古釜府湾は氷結しない。

下記の表は択捉島紗那測候所の昭和5年から昭和7年の3年間の観測表による。

平均気温

月別 年次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
S 5年	-7.7 <sup>o</sup>	-3.5	-1.1	2.1	4.8	9.0	14.1	15.9	13.7	9.4	3.6	-2.7	4.8
6年	-9.0 <sup>o</sup>	-12.9	-3.8	0.5	3.4	8.1	9.4	16.5	13.7	9.9	3.0	-2.0	3.1
7年	-3.2 <sup>o</sup>	-6.1	-4.5	0.9	5.8	10.0	9.9	14.8	11.2	9.1	4.7	-1.4	4.3

(昭和9年2月発行の北海道庁編千島概誌には中部千島についての気象の記載は無い)

北千島諸島の気象については、まだ完全に調査したものがなく報効義会当時のものと、船舶の航海中の短日月の間の観測記録に過ぎず、しかも其の観測方法も適正であったかどうか疑問であるがそれでも気候の概要を知ることが出来る。

春の前半は未だ寒く海霧は発生しないが北西風が甚だ強く、後半になって風向きが一定しなくなり4、5月頃には晴天の日もあるが時々海霧が襲って来る。5月末になって雪どけと同時に野草が僅に芽ぶき初める。夏季は海霧の発生が多く湿潤な日が続き主に南東の風が吹く。

秋になれば北西の風が多くなり9月にはもう野草は枯れ初める。

10月になると強風の日が多くなるが海霧

の発生はなく、ほとんど快晴の日が多く気分爽快で11月中旬まで続くことが多い。時には10月下旬に降雪することもあり、冬は北西風が猛威をふるう。

しかし1年を通じて寒暑の差がそれ程激しくはない。

流氷は2月頃オホーツク海から幌筈と占守の西岸、東岸に漂着して海岸を塞ぎ4月下旬又は5月上旬に消失する。南岸は流氷によって封鎖されることはない。雨は北海道にくらべて少な目で降雪量の平均値は1米以下である。しかし晴天でも地上数米は吹雪が吹き荒れ、歩行困難な日が多い。平地の大半の雪どけは5月下旬であるが、谷や山頂は7月でも残雪がある。下記の表は共に占守島片岡湾での観測である。

第1表(明治26年以来片岡湾での数多くの観測を平均せるもの) 帝国海軍調査  
平均気温

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
-3.4 <sup>o</sup>	-4.3	-3.8	0.6	3.3	7.7	11.1	11.3	11.1	8.6	1.9	-1.6	昭和9年発表

第2表 (大正元年同3年片岡湾に於ける報効義会の観測によるもの)

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
-4.4	-5.0	-3.3	2.2	5.0	8.3	12.2	12.9	11.7	7.2	1.7	-3.7	最早初雪10月11日 平均初雪10月20日

### 3. 千島略史

千島列島は、明正天皇寛永20年(1643年)日本の東海にあると噂されていた金銀島探索のため、オランダからはるばる派遣されたマールデン、ゲリッセン、フリースの率いる探険船が得撫島に到着して初めて西欧に紹介された。

中御門天皇正徳元年(1711年)露人が占守島に来て貢皮をとりたて、それ以後島から島を渡り、宝暦年間に羅処和以北を占領し、島名を改め、土人を改宗させ、1男1皮の年貢を徴収した。その上露人は更に南下を続け遂には択捉島迄狙うようになった。

択捉島以南の島は東蝦夷地の一部として、すでに松前氏の所領であったが、藩勢微弱のため露人の侵入に対して防備する力もなく、又之を幕府に報告すると転封、削封の心配があるので、ひたすら露人南下の事実を隠して、手出しも出来ずにいたのである。

たまたまハンガリー人ベニヨーウスキーが露国南侵の危機を長崎在留オランダ甲比丹に警告して来た。時の幕府も又露国の南侵を秘密にしていたが、長崎通詞やオランダ甲比丹によって漸く世間に洩れ初め、仙台藩の工藤平助、林子平、儒者平沢旭山等の識者が北辺の急を天下に警告した。この情勢に幕府も重い腰をあげ、老中田沼意次

は勘定奉行松本伊豆守秀持に命じてその真相を調査させ、天明5年普請役山口鉄五郎ら5名同下役里見平蔵ら5名を蝦夷地に派遣した。山口鉄五郎、青島俊蔵らは国後に到着したが季節が冬にむかったので北進を断念して福山へ帰った。

翌6年鉄五郎が国後に渡り、同行の最上徳内常矩は択捉から土人2人を連れて国後に帰り、露国南下の状況を調べ、再び択捉に行き、更に得撫に渡って露人に会い実状を調査した。最上徳内は択捉、得撫を踏査した最初の日本人であった。

この調査は幕府の為政者の交迭で中止になったが、露国南進の状況が明らかになったので、土人慰撫の必要から救済交易をすることになり、寛政3年普請役最上徳内、和田兵太夫の2人が択捉島と得撫島に渡り、その交易を実行したが、土人は大いに喜んだという。

其後も露人が執拗に諸島を狙うので、寛政10年幕府目付役渡辺久蔵外80名を派遣して大規模調査を行い、北方経営に乗り出す決心をした。そうして同年7月に近藤重蔵、普請役最上徳内が国後のアトイヤから土地の小舟で択捉に渡った。

重蔵の従者木村謙次の日記によると、国後に3基、択捉に1基の標柱を建てたとい

ろ。此年8月に重蔵が択捉から国後に帰り、泊で謙次に「大日本恵登呂府、江戸近藤重蔵建」と木柱に書かせて之を択捉に送り、得撫への渡口のモイレマトとカモイワッカオイとの間に建てた。また光格天皇享和元年（1801年）支配勘定格富山元十郎、小人目付深山宇平太を得撫に出張させてヲカイワタラの丘の上に「天長地久大日本属島」の標柱を建て、更にトウホ（今の床丹）に行き、露人ケレトフセに会い、交易は日本の国禁であることを諭した。

享和2年、幕府は択捉に勤番所を設けて南部、津軽両藩を警備にあたらせた。

光格天皇文化4年（1807年）になって、露人ホウストフが前年樺太を侵掠した余勢をかって、装備した船2隻を率いて、択捉島内保に上陸して五郎次ら数人の番人を捕え、米、塩、什器を掠奪し、番屋を焼打ちした。当時紗那会所には調役下役元締戸田亦太夫がいて、南部、津軽両藩が警備していたが露人の砲の襲撃にあい、応戦の甲斐もなく弾薬がつきて退却した。そして徹底抗戦を主張した亦太夫は、有萌に着いた後墳死した。5月1日に露人が又も上陸し武具、雑貨を掠め会所倉庫を焼き、2日にも上陸して負傷した南部藩火薬師大村治五平を捕え、3日出帆して北西に向った。

以上の様に乏しい武具と苦難の防衛で領土を守り続けたのであるが、明治8年択捉以北千島列島と樺太南部との交換条約が成立して、千島全島が我が領土となった。しかしこの千島諸島も第2次大戦の終戦数日前に侵攻したソ連に、不運にも占領されて現在に至っている。「島よ還れ」との日本

国民の悲痛な念願にも、横暴なソ連は耳をかそうともしない。

#### 4. 千島列島の植物

##### 1) 千島列島の植物探究史

##### 「前期探究史」（1890年迄）

1800年代の後期、東亜生物、殊に東亜北方生物に大きい貢献をしたのはロシアである。ペテルスブルグの露西亜学士院からはしばしば有力な学者が神秘めいた東方に送られ、学者も又学問探究のため生命を捧げる気概をこめていた。しかしそのロシアの科学者達も、東の果ての荒海の千島諸島迄は足をのばすことが出来なかつたので、海を行く人達の持って来た標本をもとに研鑽を怠らなかつた。

1853年にレーデブー氏が露西亜植物誌を完成した時に、すでに千島の植物は40種類記載されていた。それから1800年代の末までに、ロシアが中心となって発表された千島植物は100種類に及んだ。

レーゲル氏、マキシモウィッチ氏、ヘルデル氏らが主な人達である。しかしこの時代の研究は断片的なもので千島を主としたものではなかつたのである。

##### 「後期探究史」

こうして千島の植物研究は、学界に、ロシアによって、開拓された印象を与えたが、千島を中心とした植物研究をなしとげたのは、実は日本人なのである。そしてその研究は北大名与教授、理学博士、宮部金吾氏から始まっている。1890年に宮部博士はボストン博物学会の機関誌に、千島植物誌を公表されて、断片的なこれ迄の研究を総括

して、当時植物誌として未開であった千島列島を学界に紹介して、日本植物区系と地理分布学上に画期的な見解を与えられた。

間もなく千島開発初期の時代が来て、海洋開発と共に千島の植物研究も盛んになったのである。明治24年(1891年)片岡侍従の千島探険により、千島探険実記(1893年)が発表されたが、一行の中の多羅尾忠郎氏の採集したものを宮部博士が検定された。

明治29年(1896年)には松平氏が、北原多作氏採集品研究の結果を東京植物学雑誌に発表されている。

明治33年(1900年)には高岡参事官の千島調査によって北千島調査報告文(1901年)があり、中に宮部博士、川上滝弥氏の研究結果が掲載されている。そうして不思議なことに1900年迄の研究は、総て単位を千島列島にとっていることである。

1900年以後になると、その研究は各島の植物誌にと変化した。この初まりは内田瀨(キヨシ)氏採集のウルップ島植物目録と、川上滝弥氏の択捉島森林樹種及其分布(1901-1902年)による。そうして植物学的に多く用いられたのは、次に出た矢部、遠藤両博士の占守島植物(1904年)である。

これは著名な遠藤博士が海藻研究のため占守島滞在中に、片手間に顕花植物を研究されたもので、我が国の極北区系がまだはつきりしなかった時に、ここに着目された博士の卓見は今でも感嘆にたえないものである。

1900年代になって、武田博士は色丹島植物誌を、欧文で世界学界に発表された。

武田博士が植物分類学上の南千島、色丹

島の位置づけを確立されてから10年たって、1922年に工藤博士が北千島、幌筵島を精査されて、北千島の地理的位置を確証された。

1926年には北大学生伊藤、小森両氏がアライドに渡航し、その結果を館脇博士が札幌博物学会報に発表された。また館脇博士は1927年に、ウルップ島から松輪島までの中部千島の群落生態と地理分布の研究をなして、1931年にその結果を公表された。

このようにして、宮部博士の研究に始まった純千島探索は、武田博士の色丹島研究、工藤博士の北千島幌筵島研究と、館脇博士の中部千島研究によって、千島植物研究の大体の骨格が出来上がったのである。

## 2) 植物地理学上から見た千島列島

これまでの植物分布地理学の中で代表的な宮部、武田、工藤3博士の諸論を述べる。

千島は大陸の極東北部から日本への連りであり、同時にアリューシャン列島を通じて北米へと続く。しかし生物学的に問題の中心となるのは、千島が極東北方地帯から日本本土へどんな分布上の役割をしているかである。

すでに1879年に世界植物地理学の大家エングレル氏は、千島列島が植物分布学上重要な地点であり、殊に第4紀前期植物移動に関してその過程の重大な役目をしたと言っている。

宮部博士説(1890年)に依り千島を総括的に見ると、その区系的な親近の関係は、東亜大陸北部の影響を深くうけている。

そしてその次に東亜全般的な影響であり、更に北太平洋面の影響となる。

宮部博士は、南千島が北部日本植物区系

の影響を深く受け、北千島が北東アジアと北太平洋を含むベーリング海地方植物区系に似ていることを指摘しておられる。

そして更に豊富な極東北部大陸の寒地植物南移の行程は、千島を通してよりも、主として樺太を通して日本植物区系に移ったもので、北千島区はカムチャッカと南千島の影響を受けていると明言している。

その上将来はカムチャッカ植物も海流や渡り鳥によって、日本北部に到達するのではないかと説かれた。

武田博士（1913年）は色丹産 324 種の植物を土台とし、植物分布学上から、千島植物区系は樺太植物区系よりも、北海道本島を経て本州と親近の関係にあり、北海道植物区系は樺太よりも本州に親近の関係をもち、津軽海峡よりも宗谷海峡に植物区系境界線を置くべきだとして、宮部博士説に反論された。

一方工藤博士（1922年）は植物地理学上から、千島は 1 区とするよりも 2 区を設立するのが妥当だとして、植物区系学と群落生態学上から、はっきりと 2 区の分野を明らかにされた。

その後館脇博士がこの学界の仮説を実地で検討しようと、1927 年から同 30 年にわたって中部千島に渡航して資料を集め、1933 年に始めて工藤博士の分布線は、早くから宮部博士が唱えられた択捉海峡に置くことを確定して、更に火山形成と群落推移と区系構成を明らかにし、宮部線を定めて、北大農学部植物学教室顕花植物 3 代にわたる学界の宿題を解決した。

### 3) 千島列島植物分布区域

植物分布学上から見ても、千島は非常に興味深い所である。その上その分布状態を考えると島を構成した年代が違う毎に、生態分布や区系要素数が異なり、分布はかなり交錯している。しかし総括してみると、分布学上から最も重大な境界線、択捉海峡のミヤベスラインを基準として、南、北千島に大別し、その上更に次の様に分割する。

#### A) 南千島区

国後小区

択捉 - 色丹小区

#### B) 北千島区

a) 中部千島亜区

得撫小区

新知 - 松輪小区

b) 北千島亜区

捨子古丹 - 温禰古丹小区

幌筵 - 占守小区

南千島は北海道本島との間に非常に近い類似があり、植物数も 600 種以上あり、殊に国後小区は北海道本島に属した方がよい程である。南千島区の特徴を鮮明にしているのは、択捉 - 色丹小区である。

北千島区は植物総数 500 種以下で、カムチャッカ植物系の色彩が濃く、それを代表するのは幌筵 - 占守小区である。

その中間のウルップ島から松輪島までの中部千島は、北千島の影響を受けると共に南千島の影響も受けて、植物総数 400 種あまりで、中間の様相が明らかである。

### 4) 千島の特殊植物

次に館脇博士の発表された（昭和 9 年、

1934年) 千島の特殊植物名の一部を連記する。

A) 千島を冠名とする植物

ウラボシ科

チシマメシダ

ヒカゲノカズラ科

チシマヒカゲノカズラ、チシマスギラ  
ン

トクサ科

チシマヒメトクサ

ミズニラ科

チシマミズニラ

ヤナギ科

チシマヤナギ、チシマタカネヤナギ、  
チシマオノエヤナギ (パラムシロヤナ  
ギ)、チシママメヤナギ

イラクサ科

チシマイラクサ

タデ科

チシマミチヤナギ、チシマヒメイワタ  
デ、チシマスイバ

ナデシコ科

チシマツメクサ、チシママンテマ、チ  
シマイワツメクサ

ウマノアシガタ科

チシマトリカブト、チシマイチゲ、チ  
シマハンショウヅル、チシマヒエンソ  
ウ、チシマキンポウゲ、チシマヒメカ  
ラマツ、チシマキンバイソウ

ケシ科

チシマヒナゲシ

ナタネ科

チシマイヌナズナ

モウセンゴケ科

チシマモウセンゴケ

ユキノシタ科

チシマネコノメ、チシマスグリ、チシ  
マクモマグサ、チシマクロクモソウ、  
チシマイワブキ

バラ科

チシマヤマブキショウマ、チシマシモ  
ツケ、チシマダイコンソウ、チシマキ  
ンバイ、チシマザクラ、チシマイチゴ、  
チシマワレモコウ

マメ科

チシマモメンヅル、チシマホウハマメ、  
チシマゲンゲ、

フウロソウ科

チシマフウロ

スマイレ科

チシマキスマイレ、チシマコマンノツメ

アカバナ科

チシマアカバナ

サンケイ科

チシマゼリ、チシマニンジン、チシマ  
ハマイブキボウフウ

シャクナゲ科

チシマツガザクラ、チシマイソツツジ

サクラソウ科

チシマコザクラ (トチナイソウ)

リンドウ科

チシマリンドウ、チシマセンブリ

ムラサキ科

チシマルリソウ

オドリコソウ科

チシマオドリコ

ゴマノハグサ科

チシマシオガマ

スイカズラ科

チシマヒョウタンボク  
オミナエシ科  
チシマキンレイカ  
キキョウ科  
チシマシャジン、チシマギキョウ  
キク科  
チシマノコギリソウ、チシマハハコヨ  
モギ、チシマアサギリソウ、チシマヨ  
モギ、チシマコハマギク、チシマアザ  
ミ、チシマアズマギク、チシマウスユ  
キソウ、チシマトウヒレン、チシマタ  
ンポポ  
ミクリ科  
チシマミクリ  
イネ科  
チシマヌカボ、チシマヤリクサ、チシ  
マチャヒキ、チシマガリヤス、チシマ  
イワノガリヤス、チシマコメススキ、  
チシマヒロハノドジョウツナギ、チシ  
マイチゴツナギ、チシマガヤ、チシマ  
ドジョウツナギ、チシマザサ、チシマ  
カニツリ  
カヤツリグサ科  
キタチシマスゲ、チシマスゲ、チシマ  
ナルコスゲ、チシマミヤマクロスゲ、  
チシママツバイ  
イ科  
チシマホソコウガイゼキショウ、チシ  
マイトイ、チシマヌカボシ、チシマス  
ズメノヒエ  
ユリ科  
チシマラッキョウ、チシマクルマユリ、  
チシマアマナ、チシマゼキショウ  
ラン科

チシマアオチドリ  
B) 千島の島名のついた植物

#### 色丹島

シコタントリカブト、シコタンヨモギ、  
シコタンスゲ、シコタンアカバナ、シ  
コタンマツ（グイマツ）、シコタンヤ  
ナギ、シコタンザサ、シコタンソウ、  
シコタンハコベ

#### 択捉島

エトロフザクラ（チシマザクラ）

#### 得撫島

ウルップソウ、ウルップオウギ、ウル  
ップシオガマ、ウルップトウヒレン

#### 新知島

シムシルヤナギ

#### 計吐夷島

ケトイヤナギ

#### 羅処和島

ラショウワコザクラ、ラショウワヤナ  
ギ

#### 幌筈島

パラムシロチャヒキ、パラムシロスゲ、  
パラムシロコメススキ、パラムシロオ  
トギリ、パラムシロシオガマ、パラム  
シロヤナギ

#### 占守島

シュムシュワタスゲ、シュムシュタン  
ポポ、シュムシュクワガタ

#### 阿頼度島

アライトヨモギ、アライトノギク、ア  
ライトコハマギク、アライトソウ、ア  
ライトミヤマツメクサ、アライトヒナ  
ゲシ、アライトキンバイ、アライトキ  
ヨシソウ、アライトタンポポ

C) 千島探險者を記念するためその氏名を和名につけた植物

トチナイソウ (栃内壬五郎氏)

カワカミモメンヅル (川上滝弥氏)

セキソウ (ハサタネツケハサ) (関誠一氏)

イシノナズナ (石野敬之氏)

タラオアカバナ (多羅低忠郎氏)

ヨコヤマリンドウ (横尾壮次郎氏)

ジンボソウ (神保小虎氏)

タカオカソウ (高岡直吉氏)

アイザワソウ (相沢元次郎氏)

コダマソウ (児玉亥八氏)

オカダゲンゲ (岡田喜一氏)

コウノソウ (河野常吉氏)

ゲンジソウ (郡司成忠氏)

アイザワシオガマ (相沢元次郎氏)

カタオカソウ (片岡利和氏)

エンドウザクラ (エンドウコザクラ) (遠藤吉三郎氏)

キヨシソウ (内田澯氏)

(探險した人の業績)

相沢元次郎氏

明治33年(1900年)高岡参事官の千島探險の時に植物の採集をする。

石野敬之氏

農林省水産局技師で、中部千島の第一人者。

内田澯氏

明治24年(1891年)得撫島に渡り、植物の調査をした。

遠藤吉三郎氏

理学博士、海藻分類学の権威者で、明治36年(1903年)占守島に航海して、同島の顕花植物も同時に研究した人。

片岡利和氏

待従。明治24年(1891年)聖旨を奉じて千島探險を遂行する。

川上滝弥氏

明治31年(1898年)択捉島植物の探究をする。

河野常吉氏

さきに述べた相沢元次郎氏らに同行する。郡司成忠氏

報効会長で北千島開拓の第一人者、明治30年(1897年)植物採集をする。

児玉亥八氏

明治26年(1893年)中部千島に航海して水産調査のかたわら植物を採集する。

神保小虎氏

明治24年(1891年)択捉、得撫に渡り、地質調査と共に植物を採集する。

関誠一氏

報効会員であり、職業は薬剤師、明治30年(1897年)頃から数年占守島の植物を採集する。

高岡直吉氏

明治33年(1900年)北海道庁の命令を受けて、北千島を探險する。

多羅尾忠郎氏

明治24年(1891年)片岡待従の探險に同行して、植物を採集する。

栃内壬五郎氏

明治33年(1900年)高岡参事官の探險の際同行し、植物を採集する。

横山壮次郎氏

明治26年(1893年)千島列島地質調査の時に、併せて植物採集もする。

岡田喜一氏

昭和6年(1931年)大毎、東日の両社が

後援して、北千島の生物を探究する。

(4項千島列島の植物は、「千島概誌」の当時北海道帝国大学講師、農学博士館脇操先生の文章の1部を参考とした。)

#### 5. 片岡侍従一行の探険

明治26年5月多羅尾忠郎氏著の「北千島探険実紀」の緒言によると、侍従片岡利和氏が聖旨を奉じて千島列島を探険されるに際して、多羅尾忠郎氏(当時北海道庁属)が北海道庁の命を受けて随行することになり、一行は明治24年10月30日札幌を出発し同25年9月11日帰着した。

その概況は、24年11月19日に択捉島に上陸し取村及紗那村を点にして、エトロフ全島、色丹島を調査した。

越冬は得撫島に設営する予定であったが、渡航の時機を失し、エトロフ島シベトロ村で越冬した。翌25年5月16日に帝国水産株式会社第1号千島丸に乗船して、得撫島から東北各島を巡回して、同7月5日千島東北端の占守島モヨロップに上陸し、小屋掛けをしてここを拠点に調査した。

更に同8月5日波羅茂知(幌筵)島に渡って字オットマイチに基地を構えて巡回調査し、8月27日磐城艦に便乗して帰路につき、根室港を経て9月9日室蘭港に上陸して、9月11日札幌に帰着した。

尚各島で採取した千島産植物調査は、宮部金吾博士に整理をお願いして発表することが出来た。

終章で「本書は概略に過ぎないが、その実況は誤りのないようつとめておるので、将来千島に志ある人達が、その一端を参考

にして活躍していただければ誠に幸いである。(大意)」と結んでいるが、これによってもこの探険は、将来のために、溢れる様な使命感で苦難をのり越えた立派な調査であったことがよく判るのである。

この調査は、沿革、地理、漁業、山林、農業、鉱業、商業、鳥獣類、陸上草木及海草、行政、教育、宗教、風俗人情、開拓、港湾の将来計画等広範なものであるが、植物についてみると、採取は(78)種に及んでいる。そして今回の調査で新に千島の植物誌に加わったものは9種ある。

- (3) カタオカソウ (4) ハイキンボウゲ  
(15) チシマイチゴ (18) クロバナロウゲ  
(60) チシマラッキョウ (62) タケシマユリ  
(63) キバナノアマナ (69) イワガリヤス  
(71) カニツリグサ

註(24) タラオアカバナは新発見のように思われるが9種の中にはいっていない。採取された78種は次の通りである。

#### ウマノアシガタ科

- (1) アキカラマツ  
ムラムシル島(8月15日花)  
(2) ハクサンイチゲ  
ウルップ島(6月10日苗)  
(3) カタオカソウ

註 採取地の記録なし。但し外の資料によれば択捉、色丹両島で植生確認。

フクジュソウの類であって、形状はやや似ているが、茎葉及萼の外面は繊細な白毛に覆われ甚だ珍しいものである。この草はシベリア、ウラル山、アルタイ山等に産するけれども我が国に植生しているのを知ったのは今回が初めてである。和名は多羅尾氏と相談

して、片岡侍従の千島探険を記念して「カタオカソウ」と命名した。

- (4) ハイキンボウゲ  
パラムシル島 (7月10日花)
- (5) キンバイソウ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (6) チシマトリカブト  
パラムシル島 (8月15日花)  
草鳥頭よりやや小さく、深碧花数個  
茎梢に密着し葉縁と葉の裏面に細毛を  
密生する。エトロフ、クナシリ、ウル  
ップ島等に産するが、北海道と本州に  
は植生はない。

#### ケシ科

- (7) エンゴサクトマ  
ウルップ島 (6月10日花)  
土人根を採り洗って乾燥させ食料と  
する。少し苦味あり。

#### スマレ科

- (8) キバナノコマノツメ  
パラムシル島 (8月15日花)

#### ナデシコ科

- (9) シコタンハコベ  
パラムシル島 (8月15日花)

#### フウロソウ科

- (10) エゾタチフウロ  
パラムシル島 (8月15日花及未熟の実)

#### マメ科

- (11) センダイハギ  
パラムシル島 (8月15日花及未熟の実)
- (12) レブンソウ  
チリホイ島 (6月18日苗)
- (13) ハマエンドウ  
パラムシル島 (8月15日花)

#### バラ科

- (14) オニシモツケ  
シムシュ島 (8月17日蕾)
- (15) チシマイチゴ (新称)  
パラムシル島 (7月10日花)  
わずか6~9cmの宿根草で単茎直立  
し、葉は掌状に3出稀れに5出し、茎  
梢に1個の紅花を開く。実は熟すと赤  
くなり形はキイチゴに似て味がよい。  
このイチゴは北方圏内に広くあるが  
我が国では今回初めて発見された。

- (16) ミヤマダイコンソウ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (17) チシマキンバイ  
パラムシル島 (7月10日花)
- (18) クロバナロウゲ  
パラムシル島 (7月10日花)
- (19) シロバナノワレモコウ  
パラムシル島 (8月15日花と蕾)
- (20) ナガボノワレモコウ  
パラムシル島 (8月15日花と蕾)
- (21) ハマナス  
パラムシル島 (8月15日花と蕾)
- (22) ミヤマナナカマド  
シムシュ島 (8月15日未熟の実)

#### ユキノシタ科

- (23) クロクモソウ  
パラムシル島 (8月15日落花後)

#### アカバナ科

- (24) タラオアカバナ (新称)  
パラムシル島 (7月10日花)  
アカバナに似て草丈12~15cm数本簇  
生し、茎の下部は湾曲し立つ葉は茎の  
下部では対生し上部では無柄互生して

密着している。

中部の葉は長楕円卵形で無柄。脚部が急に円形となり上部は鈍頭である。

葉縁には小鋸歯がまばらについて、茎梢と葉腋から藤色の花数個を密出する。萼と弁は共に4枚で弁は萼より長い。柱頭は狭いすりばち状で、この種はベーリング海沿岸の地方と千島諸島に産する。

多羅尾氏採取なので記念のためこのように名付けた。

#### セリ科

(25) チシマニンジン

チリホイ島 (6月18日苗)

(26) マルバトウキ

チリホイ及パラムシル島 (6月18日苗)

(27) ハナウド

パラムシル島 (8月15日花)

#### ミズキ科

(28) エゾゴゼンタチバナ

パラムシル島 (7月10日花)

(同所 8月15日実)

#### キク科

(29) アキノキリンソウ

ウルップ島 (8月15日花)

(30) ヤマハハコ

チリホイ島 (6月18日苗)

(31) ノコギリソウ

パラムシル島 (8月15日花)

(32) コハマギク

パラムシル島 (8月15日花)

(33) ヨモギ

チリホイ島 (6月18日苗)

(34) サマニヨモギ

パラムシル島 (8月15日花)

(35) シロヨモギ

パラムシル島 (8月15日花)

(36) エゾオグルマ

パラムシル島 (8月15日花)

(37) ハンゴンソウ

パラムシル島 (8月15日)

(38) エゾノコウモリソウ

チリホイ島 (6月18日苗)

(39) チシマアザミ

チリホイ島 (8月15日花)

(40) キタアザミ

パラムシル島 (8月15日花)

(41) コウゾリナ

パラムシル島 (8月15日花)

(42) タンポポ

パラムシル島 (8月15日実)

(43) ハチジョウナ

パラムシル島 (8月15日花)

#### キキョウ科

(44) チシマギキョウ

パラムシル島 (8月15日花)

#### ジャクナゲ科

(45) イワヒゲ

チリホイ島 (6月18日花実共になし)

(46) アオノツガザクラ

パラムシル島 (8月15日実)

(47) キバナジャクナゲ

チリホイ島 (6月18日花なし)

(48) エゾツツジ

パラムシル島 (8月15日花)

(49) ツマトリソウ

パラムシル島 (8月15日花)

- リンドウ科
- (50) チシマリンドウ  
パラムシル島 (7月18日花)
- (51) チシマセンブリ  
パラムシル島 (8月15日花)
- ゴマノハグサ科
- (52) エゾノカワジサ  
パラムシル島 (7月10日花)
- (53) シオガマギク  
パラムシル島 (8月15日花)
- (54) エゾノヨツバシオガマ  
パラムシル島 (8月15日花及び実)
- タデ科
- (55) ジンヨウスイバ  
パラムシル島 (8月15日花及び実)
- カバノキ科
- (56) ミヤマハンノキ  
シムシュ島 (8月17日未熟の実)
- アヤメ科
- (57) ヒオウギアヤメ  
パラムシル島 (7月10日蕾)
- ユリ科
- (58) マイズルソウ  
パラムシル島 (8月15日葉)
- (59) ギョウジャニンニク  
チリホイ島 (6月18日若苗)
- (60) チシマラッキョウ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (61) クルマユリ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (62) タケシマユリ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (63) キバナノアマナ  
ウルップ島 (6月10日花)

- イグサ科
- (64) イグサ  
パラムシル島 (7月10日蕾)
- (65) ハマイ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (66) ミヤマノスズメノヒエ  
パラムシル島 (8月15日花)
- カヤツリグサ科
- (67) チシマステ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (68) スゲの一種  
パラムシル島 (8月15日花)
- イネ科
- (69) イワガリヤス  
パラムシル島 (8月15日葉)
- (70) コメススキ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (71) カニツリグサ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (72) ナガハグサ  
チリホイ島 (6月18日苗)
- (73) ヒメナガハグサ  
パラムシル島 (8月15日花)
- (74) イチゴツナギの一種  
ウルップ島 (6月10日苗)
- (75) エゾノドジョウツナギ (新称)  
パラムシル島 (8月15日花)
- (76) オオウシノケグサ  
パラムシル島 (8月15日葉)
- (77) テンキグサ  
パラムシル島 (8月15日葉)
- トクサ科
- (78) トクサ  
パラムシル島 (8月15日茎)

その他標品はないけれども多羅尾氏の説明によれば、シャクナ（コジャク）、オオバイラクサ、ハイマツ（ヒネキリマツ）はシムシュ島及びパラムシル島に沢山あるという。

## 6. 北千島調査の経緯

昭和52年9月30日発行の「千島博物誌」は、昭和19年1月に発行された「千島学術調査研究隊報告書」第一輯を、改題、復刊したものである。その巻頭の犬飼博士の文章を引用させていただいて、千島の歴史の一面と、調査研究隊の使命を考えてみたい。

### 北千島調査の経緯

北海道大学名誉教授

犬飼哲夫

今から約100年前の明治8年（1875）に日本とソ連（当時はロシア）の間で、千島樺太交換条約が結ばれた。それ以前は千島も樺太も領土的に帰属が不明確で、両国間の紛争が絶えなかったが、この条約により、千島列島全域が日本、樺太全島はソ連領と確定した。そもそも千島は、世界的に珍重されたラッコの毛皮の産地で、欧米の漁獣船が盛んに出沒していた。

その中でもソ連は千島の若干の島を独占し、ラッコ採集の基地とし、日本人が居住していた南千島に脅威を与えていた。

条約締結の後にはわが国は千島開発のため、政府の高官等を現地視察に派遣したが、北洋の荒波と寒冷に辛惨を極め、計画は遅々として進まなかった。この時世界情勢の動向から千島の国防的重要性を痛感し、北千

島の移住開発のため、海軍の退役将校の郡司成忠大尉を主班とする報効義会なるものが結成され、無謀にも五隻の手漕ぎボートに分乗して、東京湾を出発して千島に向った。時は明治26年3月20日のことである。

約100人の隊員の中には後年（明治45年、1912）に南極探検で、南緯80度5分に達し、その当時としては驚異的記録を作った白瀬中尉がいた。

北千島に向った郡司大尉の一行は、途中暴風になる遭難等で、多くの犠牲者を出し、辛うじて北千島の占守島に上陸した。この時の隊員はわずか8人であった。

その後日清戦争があつて郡司大尉が応召し、移民計画は一時中絶したが、明治29年（1896）に至って本格的移民が送られ、婦人も伴われ、漁業を主として生産業をはじめたが、明治37、8年の日露戦争で、壊滅的打撃を受けてしまった。

しかし戦後は、戦勝国日本は、北洋における大漁場の獲得となつて、北千島はその基地となり、産業的に重きをなすに至り、漁業関係の近代的工場等も建設され、いちじるしい発展をとげた。

一方中部千島は、豊富な海獣並に漁類の資源維持のため、農林省水産局の管理の下で、完全な立ち入り禁止の封鎖地域とされた。ところがこの間に、ソ連並にアメリカは、千島列島の軍事的重要性に着眼し、ひそかに戦略的偵察が行われていた。

わが国の北洋の漁場は、毎年のように外交上の問題になっていたが、千島に関する限り無風地帯と考え、いずれかといえば漁業一辺倒の傾向にあつたのは誤りであつた

と思われる。やはり郡司大尉の考えの如く、千島の陸上開発は早晚必要になって来るのである。そのためには、千島の自然環境の基本的調査が伴わなければならない。

千島の自然環境の学術的調査は、最初に英国人スノーによって行われた。

スノーは実はわが国が千島全域をラッコの禁猟区にしていたのに、公海における猟という名目のもとに沿岸のラッコを捕っていた密猟者の一人であった。

しかし彼は千島で暴風による遭難で、孤島に越年していた間でも、自然観察を続け、後にこれを学術的に報告し、北海道庁はその一部を北千島調査報告文に引用した。

その後わが国は次第に千島の重要性を認識しはじめ、昭和6年(1931)には大阪毎日、東京日日新聞社の後援で、長谷川、岡田、木場の三人の自然科学者を北千島に送って調査をさせ、その結果の概要を、北千島概観として生物地理学会(昭和8年)に発表した。

さらに北海道庁は昭和7年に、中村技師外14名の技術者を北千島調査に派遣した。

太平洋戦争勃発の危機が迫るや、ますます千島の重要性が高くなり、各方面からの要望に応じて、総合北方文化研究会が作られ、昭和16年夏に千島学術調査研究隊を北千島に送った。その時の調査結果の第一輯は、本書で発表された。これに続いて調査が行われることになっていたが、太平洋戦争のため中止された。本書に執筆者の半数以上は既に故人となったが、一ヶ月にわたるこの調査は、現地の漁業関係者の多大の好意に預ったが、物資の不足に加えて船舶

の不自由から、往復の交通は貨物船により、濃霧と荒波でその時の肉体的労苦は言語に絶するものがあった。

本調査隊一行の植物に関する調査は、守備隊員と軍馬のための非常食となる植物と薬草などの有用植物を調べたが、それと共に植物の植生確認も併せて行なわれ、200種あまりが発表された。北千島の植物について主なものを列記する。

アイザワシオガマ、アオノツガザクラ、アキカラマツ、アカバナ、イワウメ、イワオトギリ、イトキンズゲ、イワハタザオ、イワヒゲ、イワノガリヤス、ウラシマツツジ、ウズラバハクサンチドリ、エゾエンゴサク、エゾキンバイソウ、エゾコザクラ、エゾゴゼンタチバナ、エゾツツジ、エゾノシンウド、エゾノオオバセンキュウ、エゾノチチコグサ、エゾハマハタザオ、エゾバイケイソウ、エゾマルバシモツケ、エゾヨツバシオガマ、エゾレンリソウ、エンドウコザクラ、エンコウソウ、オオバタケシマラン、オオバナエンレイソウ、オオタチツボスミレ、オオウシノケグサ、オオヤマフスマ、オクエゾスギナ、オニシモツケ、オニカサモチ、カラフトイチゴツナギ、カンチコウゾリナ、カンチスゲ、ガンコウラン、キタチシマスゲ、キバナシャクナゲ、キバナノアマナ、キバナノコマノツメ、キバナシオガマ、ギョウジャニンニク、キョクチソモソモ、キンロバイ、クモマスズメノヒエ、クルマユリ、クロバナロウゲ、クロマメノキ、クロユリ、グンジソウ、コカネギク、コケモモ、コツマトリソウ、コハマギ

ク、コバノヨツバムグラ、コフタバラン、  
コミヤマカタバミ、コメススキ、コモチト  
ラノオ、サマニヨモギ、サヤスゲ、シコタ  
ンハコベ、シムシュクワガタ、シムシュト  
ウヒレン、シムシュワタスゲ、シャク、シ  
ラネワラビ、シロイヌナズナ、シロサマニ  
ヨモギ、シロワレモコウ、ジンヨウスイバ、  
スギカズラ、センダイハギ、ダイセツイワ  
スゲ、タイツリオウギ、タカオカソウ、タ  
カネナナカマド、タカネノガリヤス、チシ  
マアザミ、チシマアマナ、チシマイトキン  
ポウゲ、チシマイチャクソウ、チシマイチ  
ゴ、チシマイラクサ、チシマイワブキ、チ  
シマウスバスマレ、チシマオトギリ、チシ  
マオノエヤナギ、チシマカニツリ、チシマ  
キタアザミ、チシマキンバイ、チシマギキ  
ョウ、チシマゲンゲ、チシマコウゾリナ、  
チシマシオガマ、チシマスイバ、チシマス  
ズメノヒエ、チシマセンブリ、チシマタチ  
ツボスマレ、チシマタネツケバナ、チシマ  
トリカブト、チシマヒカゲノカズラ、チシ  
マフウロ、チシマミクリ、チシマミヤマク  
ロスゲ、チシマリンドウ、チシマヤナギ、  
チシマヤマブキショウマ、チシマヨモギ、  
チシマラッキョウ、チングルマ、ツルキジ  
ムシロ、ツルコケモモ、ツマトリソウ、ト  
クサ、ナヨシダ、ヌイオウスゲ、ハイキン  
ポウゲ、ハイスミレ、ハイヤナギ、ハクサ  
ンイチゲ、ハクサンチドリ、ハナイカリ、  
ハナウド、ハナゴケ、ハナタネツケバナ、  
ハマエンドウ、ハマオグルマ、ハマナス、  
ハマニンニク、ハマベンケイ、ハンゴンソ  
ウ、ヒオウギアヤメ、ヒカゲノカズラ、ヒ  
ロハスギカズラ、ヒメカラマツ、ヒメカン

バ、ヒメクモマダサ、ヒメクワガタ、ヒメ  
シャクナゲ、ヒメチシマヤナギ、ホソバキ  
ソチドリ、ホロムイイチゴ、ホロムイスゲ、  
マイズルソウ、マルバトウキ、マンネン  
スギ、ミズバショウ、ミツバオウレン、ミネ  
ズオウ、ミネハリイ、ミミコウモリ、ミヤ  
マサギスゲ、ミヤマスマレ、ミヤマタニタ  
デ、ミヤマダイコンソウ、ミヤマハタザオ、  
ミヤマハンノキ、ムカゴトラノオ、ムシト  
リスミレ、モウセンゴケ、リンネソウ、ヤ  
チマメヤナギ、ヤナギラン、ヤマガラシ、  
ヤマハハコ、ヤラメスゲ。

## 7. 最近の千島問題について

昭和56年に千島返還運動に関して、漸く  
2月7日を「北方領土の日」とすることを  
決めた政府は、大変スロモーではあるが、  
日本国民あげての願望としての形が整い初  
めたことになる。

千島を追われた人達の多く住む北海道民  
感情としては何とも歯がゆい事で、もっと  
早くから日本国民の総意として強く交渉し  
てもらいたかったが、徳川幕府以来千島に  
ついては後手後手に廻っている拙劣外交は、  
まことに嘆かわしい次第である。

新聞情報も最近になって千島について賑  
々しくなった。北海道新聞に記載されたそ  
の2、3の概要を報告してこの物語の終り  
としたい。

昭和55年12月8日朝刊

「戦前の北方領土旧7カ村、亡命村で再  
建へ、住民募集し村長選も、根室で新運動  
スタート」という見出しで、ソ連が占領し

ている北方領土の旧7村を「亡命自治体」として再建しようという計画が7日、根室市で開かれた「北方領土の返還を求める市民の会」の総会で決った。

旧島民だけでなく、希望すればだれでも村民になれる構想である。

戦前まで歯舞（ハボマイ）群島と根室半島にまたがった歯舞のほか、色丹島に色丹、国後島に泊（トマリ）、留夜別（ルヤベツ）、択捉島に留別（ルベツ）紗那（シャナ）、しべ取（シベトロ）の計7村があった。約16,500人が住んでいたが、ソ連占領後、着のみ着のままで根室へ引揚げ、いまだに帰れないでいる。「市民1人1人が返還要求を」と草の根活動を続け、旧島民からの助言を得て、7カ村再建計画をまとめたものである。

昭和55年12月12日朝刊

シリーズ・評論として「対ソ外交と北方領土(1)」では元外務事務次官、法眼晋作氏が「ソ連はまず銃剣を外せ」という題で、次のように述べている。

戦後日ソ間で平和条約の締結交渉が続けたが、領土問題では意見の一致を見られなかったが、劣悪な条件下の捕虜解放のために領土問題を国交正常化後の交渉にまかせて（1956年9月29日 松本・グロムイコ交換公文）とりあえず外交関係を再開することに合意した。

国交正常化の後、日本側はしばしば外交上のルートを通じて領土返還の交渉を続けた。ソ連は要求に耳を傾けながら、今は時期が悪いとか、日本にだけ譲歩すれば、他

の国や地域からの要求が続出るとかの言い訳に終始した時期があって、欧州での国境問題や中国の国境紛争を暗示する発言であった。ソ連側は、日ソ間の領土問題は、戦争中及び戦後の国際取り決めによって解決済みであると主張していたのを、初めて両国の間には戦後なお未解決の問題があり（1973年10月）その問題のうちには領土問題があることを口頭で明白に認めたのは、当時の田中首相の激しい交渉の成果であった。

しかしソ連側は1976年ごろからその態度をひるがえして、田中・ブレジネフ共同声明以前の態度に逆もどりし初めた。

一国の最高主脳が外国の首脳との公式の合意を、後になって簡単にひるがえした事実は重大である。ソ連人も銃剣の下では交渉が出来ないという民主主義の原則を、少しは理解した方がよいのではないか。

昭和55年12月15日朝刊

イギリス生れでオーストラリアの国籍をもち、元同国駐ソ大使館の一等書記官を勤めたことのある、上智大学教授のグレゴリー・クラーク氏は、シリーズ・評論「対ソ外交と北方領土(4)」で「不平等条項論 掲げよ」と題して大略下記の趣旨で論じている。

日本とソ連の関係が現在、冷えきっているとされているが、これは北方領土問題と日本人のソ連ざらいとが組み合わされたものだと思う。そのために日本が北方領土返還を求める従来までの取り組み方を抜本的に洗い直すことが必要である。

これまでの態度は感情的に過ぎてムチャクチャで理屈にあっていない「固有の領土だから返せ」と主張しているが、外交上、昔、どうだったというようなことは意味がない。国際間で通用するのはあくまでも条約だ。

1951年のサンフランシスコ平和条約で、日本は千島列島を放棄している。

この千島列島には「国後、択捉、歯舞、色丹4島を含む」と解されておる。

ところが1954年になって「平和条約にある千島列島には4島は包含されていない」と態度を変えた。とはいえ、平和条約上は4島を放棄したことになっており、固有領土論で返還を要求するのは同条約を無視していることになる。

ただしサンフランシスコ講和会議に首席全権として臨んだ吉田首相が同条約にサインするに際して「歯舞、色丹はもちろん、国後、択捉にはかなり以前から日本人が住みついていた歴史があって日本領土である」旨の抗議をしている事実に注目しなければならぬ。

日本は戦争状態の終結を図らねばならず、やむを得ず同条約を受諾したものだ。

このようにみれば、日本が北方領土返還を要求するにあたって2つの手がかりのあることがわかる。

1つはサンフランシスコ平和条約の問題。

同条約で日本が放棄した北方領土には4島が含まれている、との解釈に立ち戻りながらも、これに吉田首相が署名したが、4島の領有権を主張して反駁した事実がある

こと。

もう1つは、戦後の領土処理は当事国である日本を抜きにして、ヤルタ協定などで連合国側が一方的に取り決めたものであること。

この2つのことから、平和条約中の領土に関する事柄は明らかに「不平等条項」であると指摘できる。

「不平等条項」という概念は外交交渉上、正当な主張として広く受け止められているもので、現在日本がとっている「固有領土」との言い分よりも、相手に対してはるかに説得力を持つと考える。

日本は「不平等条項」であるとの解釈を内外に表明し、だから「4島を返せ！」とソ連に要求したらよい。

幕末に米、英など諸外国と締結した不平等条約を、粘り強い交渉で改正させた明治人の冷静で理詰めな対応ぶりを学ぶべきだ。

先に首相を引退したコスイギン氏とともにブレジネフ書記長も、ソ連国内ではハト派で親日家でもある。ソ連指導部がいつ交代するかも知れず、現在は領土問題を交渉する最後のチャンスとも考えられる。

参考文献 北海道庁編 千島概誌

総合北方文化研究会編 千島博物誌

多羅尾忠郎著 千島探険実紀

北海道新聞

